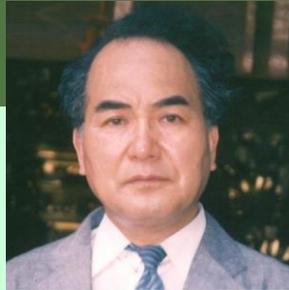
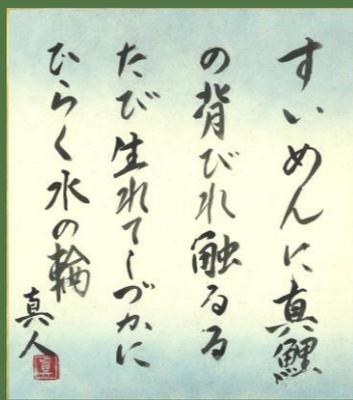


たんば まさんど  
**丹波 真人**



自筆色紙(No.19)  
「すいめんにも真鯉の背びれ触るるたび  
生れてしづかにひらく水の輪」

目の前を泳ぐ真鯉を見つめていると、真鯉の背びれが水面に触れるたび、ゆるやかに波紋がひろがってゆくのが見える。この何でもない光景がただ面白くて、思わず詠んでみた一首といえます。



1944年、神奈川県平塚市に生まれ、父母の郷里群馬県藪塚本町(現・太田市)に疎開(1972年より埼玉県上尾市に転居)。大学卒業後、平凡社に入社。歌人・初井しづ枝の作品に魅かれて、1976年に「コスモス短歌会」に入り宮柊二に師事。『桑年』にて埼玉県歌人会賞を、『朝涼』にて埼玉文芸賞を受賞する。2014年に埼玉県歌人会副会長を務めたほか、コスモス短歌会埼玉支部長なども担当する。

“三十年前から” 埼玉県歌人会の事務局を担当していた大西民子が結成まもない頃を回想しているエッセイ

県内歌壇の超結社的な団体として、埼玉県歌人会が結成されたのは、昭和二十九年十一月二十一日のことである。その日、大宮公園のポート池の北側、現在県立博物館となっている地域に、和風建築の県立文化会館が建っていて、そこを会場として第一回短歌大会が開催されたのである。昭和三十年一月二十日発行の「埼玉文化月報」の記事によると、その日は秋日和の晴天で、百五十人ほどの出席者があったと報じられている。

(中略) 三十年四月にはガリ版刷りの会報を出した。五月に開催される春の大会の作品募集を兼ねたものである。その会報には、県歌人会の初代の役員名簿ものっている。常任委員は、石川信夫、大野誠夫、小笠原文夫、加藤克巳、狩野登美次、鈴木幸輔、中津賢吉の七氏で、この七人が数年



▲「埼玉歌人」No.29 (No.23)  
1984年12月1日発行

間短歌大会の選者を兼ねておられた。歲月茫茫、亡くなられた方も多し。三十三人の委員も定められたが、その一人であった大西民子は、文化会館に勤務していた関係から事務局を担当した。当時会費は年額百円、会員数は百五十人ほどであったと思う。

昭和四十三年に博物館建設のことが決まって大西は転勤、事務局を退かせて頂いたが、三十年間を顧みると懐かしい思い出ばかりである。初代代表となられた小笠原文夫氏、引き継いで会長となられた加藤克巳氏を中心に、一糸乱れず会は発展を続け、その中で私自身も勉強させて頂いて来た。

「埼玉歌人」No.29より



▲「埼玉歌集」1巻(No.24)  
1964年刊行



▲「埼玉歌集」13巻(No.25)  
2024年刊行

大西民子 (1924~1994)

戦後を代表する女流歌人のひとり。岩手県盛岡市出身。25歳の時に大宮へ移り住む。自身の日常生活を赤裸々に詠んだ第一歌集『まぼろしの椅子』で注目を集める。『風水』で逍空賞を受賞。紫綬褒章受賞。1994年死去、享年69。



2024年10月10日  
さいたま市立大宮図書館  
さいたま市大宮区吉敷町1-124-1  
電話 048-643-3701  
FAX 048-648-8460

第24回企画展

第3回 **埼玉の歌人たち**

—短歌に込めた想い—

2024年10月10日(木)~2025年1月13日(月)

長年埼玉で活躍した7人の歌人が詠んだ自筆の色紙・短冊や原稿などを展示します。

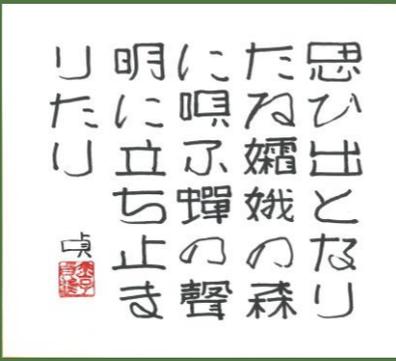
歌人名	No	種別	内容
金子貞雄	1	色紙	「思ひ出でとなりたる孀娥の森に唄ふ蟬の聲明に立ち止まりたり」 金子貞雄 筆
	2	原稿	「聲明の森」 金子貞雄 筆
	3	歌集	『聲明の森』 金子貞雄 著 2010年刊行・初版 短歌新聞社
沖ななも	4	色紙	「この椅子をわたしが立つとそのあとへゆっくり空がかぶさってくる」 沖ななも 筆
	5	原稿	「木」 沖ななも 筆
	6	歌集	『衣裳哲学』 沖ななも 著 1982年刊行・初版 不識書院
綾部光芳	7	色紙	「落ちてくる光の粒を拾はむか息をしづめてほたるの沢に」 綾部光芳 筆
	8	原稿	「第九歌集『青燐』より 五十首」 綾部光芳 筆
	9	歌集	『青燐』 綾部光芳 著 2022年刊行・初版 角川文化振興財団
外塚喬	10	色紙	「大いなる枝がおとされ空間にはばたく鳥はひかりの礫」 外塚喬 筆
	11	原稿	「火鉢と文机」 外塚喬 筆
	12	歌集	『漏告』 外塚喬 著 2007年刊行・初版 角川書店
今井恵子	13	色紙	「ここよりは海の領域 階ひとつ降りれば水平線がかたむく」 今井恵子 筆
	14	原稿	作者解説 今井恵子 筆
	15	歌集	『運ぶ眼、運ばれる眼』 今井恵子 著 2022年刊行・初版 現代短歌社
内藤明	16	色紙	「入間野の赤提灯にクハバラとクハハラさんが今宵酒飲む」 内藤明 筆
	17	原稿	「北入曾の道『虚空の橋』より」 内藤明 筆
	18	歌集	『虚空の橋』 内藤明 著 2015年刊行・初版 短歌研究社
丹波真人	19	色紙	「すいめんにも真鯉の背びれ触るるたび生れてしづかにひらく水の輪」 丹波真人 筆
	20	原稿	『朝涼』 丹波真人 筆
	21	歌集	『朝涼』 丹波真人 著 2018年刊行・初版 ながらみ書房
	22	原稿	「三十年前から」 大西民子 筆
	23	冊子	「埼玉歌人」No.29 1984年12月1日発行 埼玉県歌人会事務局
	24	書籍	「埼玉歌集」1巻 加藤克巳 編 1964年刊行 埼玉県歌人会
	25	書籍	「埼玉歌集」13巻 埼玉県歌人会歌集編集委員会 2024年刊行

今回展示している資料No.6、22、23、24は大宮図書館蔵、それ以外の資料は各々の関係者よりお借りしました。またこの目録では各歌人を展示順で掲載しています。

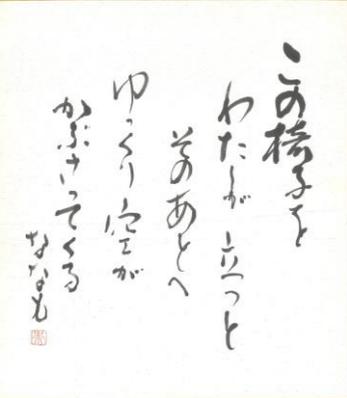
かねこ さだお  
**金子 貞雄**



自筆色紙(No.1)  
「思ひ出となりたる嬢娥の森に唄ふ  
蟬の聲明に立ち止まりたり」  
「嬢娥」とは、戦争未亡人であった母のこと。1997年2月その母が亡くなった。同じ年の夏、ある劇場で仏教音楽の「声明」の大合唱を鑑賞し大きな感動を得た。そして、その日の帰路公園にさしかかったとき蟬たちの大合唱に出会い、それがあたかも母へささげる「声明」のように見え、感涙してしまったのです。



1941年、埼玉県熊谷市に生まれる。歌人・大野誠夫に師事し、1964年大野が主宰する「作風」に入会し、現在代表を務める。1982年、歌集『嬢娥の森』で埼玉県歌人会新人賞を受賞。2014年に埼玉県歌人会会長に就任し、現在は同会顧問。昨年まで「埼玉文学賞」審査員を担当したほか、現代歌人協会会員、熊谷短歌会会長などを務める。2021年より「埼玉新聞」歌壇選者を担当。『嬢娥の森』のほかに『声明の森』などの歌集がある。



自筆色紙(No.4)  
「この椅子をわたしが立つとそのあとへ  
ゆっくり空がかぶさってくる」  
「空」は、「くう」とも「から」とも「あく」とも読む。「空虚」とか「空っぽ」とか「席が空く」とか。しかしほんとうにそうか。私という実態が去った後は空虚なのか空っぽなのか。そんなことはない。見えないけれど触れられないけれど「空」が埋めている。空という実態がしっかりと埋めてくれている。「無」は、ないのではなく「無」というものが在るのだ。

1945年茨城県古河市に生まれる(1955年、埼玉県浦和市に転居)。自由詩である現代詩から定型詩である短歌に興味を持つ。1974年、歌人・加藤克巳主宰の「個性」に入会。2004年「個性」終刊により「熾」を創刊。歌集『衣裳哲学』により現代歌人協会賞、埼玉文芸賞を受賞。現・埼玉県歌人会会長。2020年、大西民子についての評論『全円の歌人 大西民子論』を刊行。『衣裳哲学』のほかに『日和』などの歌集がある。

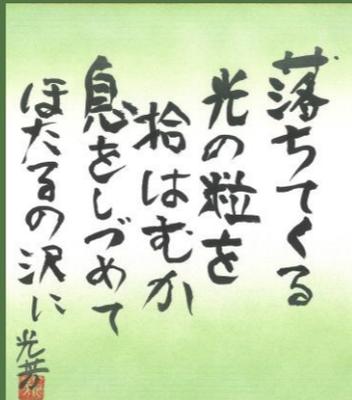


おき  
**沖 ななも**

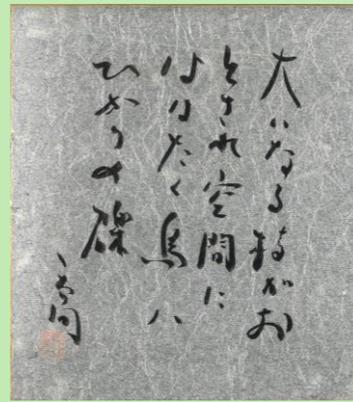
あやべ みつよし  
**綾部 光芳**



自筆色紙(No.7)  
「落ちてくる光の粒を拾はむか  
息をしづめてほたるの沢に」  
子供の頃、家の中に螢が迷い込んできたことがあった。近くの田圃に行き何匹も捕まえてきて蚊帳の中に放ったことがあったが、それ以来、螢は特別な生きものになってしまったようだ。この歌は、飯能市の原市場周辺の名栗川辺で体験したときの一首で、私にとって螢は、異界からの使者なのでもある。



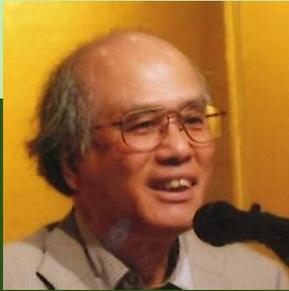
1934年、埼玉県飯能市に生まれる(2011年より、埼玉県秩父市に在住)。伯父の主宰する短歌結社「ささ」に在籍し、1970年「作風社」に入会し、歌人・大野誠夫に師事。大野の没後、歌人・宮岡昇主催の「樹液」に入会、宮岡没後の1997年に響短歌会を主宰し現在に至る。『青燐』にて埼玉文芸賞を受賞。現在、埼玉県歌人会理事、現代歌人協会会員を務める。『青燐』のほかに『水晶の馬』などの歌集がある。



自筆色紙(No.10)  
「大なる枝がおとされ空間に  
はばたく鳥はひかりの磔」

近隣をよく散歩している。その折に、目にした光景である。生い茂った木々の中で鳴いている小鳥の声は、心を癒してくれる。ある日、枝打ちされてしまった木木の中に小鳥の姿を見つけたことができたのだ。素早く動く小鳥は、まるで光の磔のようでもあった。

とのつか たかし  
**外塚 喬**



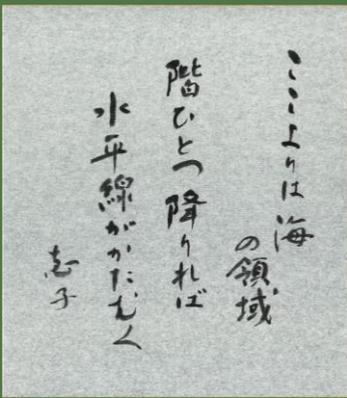
1944年、栃木県に生まれる(1970年より埼玉県所沢市に在住)。父の手元の雑誌「多磨」を見て短歌に興味を持つ。1962年に「形成」に入会し、歌人・木俣修に師事。1994年、月刊歌誌「朔日」を創刊。歌集『鳴禽』にて現代短歌大賞を受賞。埼玉県歌人会理事、現代歌人協会副理事長を務める。現在、埼玉文芸賞選考委員、さいたま子ども短歌賞選考委員。『鳴禽』のほかに『喬木』などの歌集がある。

いまい けいこ  
**今井 恵子**

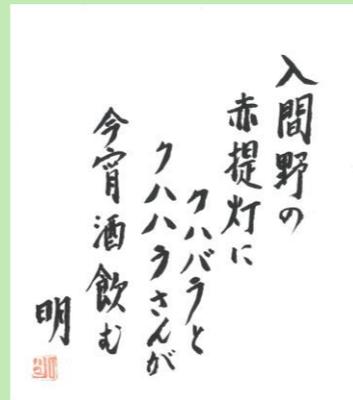


自筆色紙(No.13)  
「ここよりは海の領域  
階ひとつ降りれば水平線がかたむく」

2009年、岡倉天心の『茶の本』を読んだ。五浦へ行きたくなくて友人と四人で出かけた。崖上の六角堂から太平洋を望む。遙か彼方まで海の領域がひろがる。その向こうは異文化の国アメリカである。天心は、日本の思想の特色を「何ものかを言わずにおくことによって、見る者はその思想を完成する機会をあたえられる」と言った。物事はすこし視点を変えるだけで全く違う表情を見せる。



1952年、東京都に生まれる(1987年より埼玉県鴻巣市に在住)。高校時代に言葉の伝達機能について考え始め、1973年に窪田章一郎主宰の「まひる野」に入会し作歌を始める。現在、「まひる野」の選歌・運営委員を担当。「求められる言葉」にて現代短歌評論賞を、『運ぶ眼、運ばれる眼』にて佐藤佐太郎短歌賞を受賞。『分散和音』や『やわらかく曇る冬の日』などの歌集がある。



自筆色紙(No.16)  
「入間野の赤提灯に  
クハバラとクハハラさんが今宵酒飲む」

埼玉に引っ越してから三十余年棲んでいる北入曾は、古くは入間野と呼ばれた地。毎年秋には入曾の神社に獅子舞が奉納される。飲み屋のカウンター席に居合わせた年配のお二人。「桑原」姓の「はら」か「ばら」か清濁は微妙で、それぞれ譲ることはない。男女の性も異なるが、会話は和気藹々として続き、冬の夜は更けていく。

ないとう あきら  
**内藤 明**



1954年、東京都に生まれる(1993年より埼玉県狭山市に在住)。大学時代に歌を試み、1982年、歌人・武川忠一主宰の「音」創刊に参加し、現在発行人。『虚空の橋』にて佐藤佐太郎短歌賞、若山牧水賞を受賞、『薄明の窓』にて埼玉県歌人会賞、迢空賞を受賞する。日本文学の研究者としても活躍し、上記の歌集のほか『万葉集の古代と近代』といった著作を刊行している。